No.７０

芥川だより

編集発行人　下村嘉明
発行所
☆ 着物から服へ
着物から服を仕立てます
高槻市芥川町２－１４－３
℡072－681－8870

発行日＊＊＊2011年6月1日　　e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp
皆様からの投稿をお待ちしております
http://www.justmystage.com/home/akutagawa/

＊＊＊＊＊＊＊＊　一部５０円です　＊＊＊＊＊＊＊＊

「行けぬ谷」の恐怖

山猿が信州からフキ味噌を手土産に来阪した。M蔵と由ベエにも声をかけ、久しぶりに４人（写真：左から私、由ベエ、M蔵、山猿）が集まって痛飲した。

この４人は学生時代のほんの数年、山行を共にしただけの間柄だが、ほかの先輩や後輩との間にはない、ある種特殊な濃密性がある。その結びつきを他に代えがたく強固にしたのは４０年前の５月、剱岳・池ノ谷ガリーを登った恐怖の登攀にある。われわれ４人は当時、体力的にも技術的にも充実し、山屋として高いレベルに達していた。そんなわれわれに剱は最高の舞台を用意して、待っていた。

「行けぬ谷」に由来する池ノ谷は、語源どおり人を寄せつけぬ急峻な谷である。ガリーは谷の最上部に位置する。このガリーが、まるで姿見鏡を立てかけたような有りように豹変していたのだ。ピッケルのツァッケをはじき返すほどの硬い青氷でコーティングされた姿見は、われわれを恐怖の底に突き落とすにじゅうぶんな舞台装置だった。

――登れるものなら登ってみよ。足がすくんでいるじゃないか。さっさとしっぽを巻いて逃げ帰るがいい。

剱の挑発をはね返すほどの強力な武器はわれわれにはない。あるのは１本のピッケルと、氷壁登攀には適さない十本歯の貧弱なアイゼンのみだ。恐怖に支配されたわれわれは無言のまま、凍りついた懸崖を見上げるばかりだった。リーダーのM蔵の腹には、そうとうヤバイが、ガリーを登りきるだけの体力と技術は４人にはある、という確信みたいなものはあった。

「行こか」、M蔵のつぶやくように発した一言に押されるように、私はガリーに取りついた。うしろに山猿、由ベエ、M蔵とつづく。もはや引き返すことはできない。氷にわずかに食い込んだアイゼンの爪とピッケルの切っ先だけをたよりに氷壁にへばりつき、上へ上へと身体を運んでいく。１５分ほど登ると、ふくらはぎは緊張しはじめ、筋肉がつるのではないかという恐怖が加わった。

少しでもバランスを失えば、死ぬ。鏡のような氷の斜面をアイゼンとピッケルがつかみ損なえば、死ぬ。恐怖に気おされて弱気に腰が引けば、死ぬ。４人は、ナイフの刃のようなリッジのうえを微妙なバランスをたもちながら進んでいるに等しい。のっぴきならない状況の過酷さに恐怖心は昂まるばかりだ。恐怖に押しつぶされそうな時が刻一刻と過ぎてゆく。

そんな緊迫した時間も終わりに近づいてきた。１時間ほど登ると、心もち傾斜が緩くなってきた。と同時に恐怖心も少し和らぐ。ガリー頂部の池ノ谷乗越に近づくにしたがって、傾斜はますます緩くなり、やがて恐怖から解放される。乗越に着いたとき、無事にガリーを登りきった達成感と、生きているんだという歓びが全身にみなぎっていた。

４人が集まり、酒がまわってくると、この想い出が誰からともなく語られる。このときもそうだ。「あれが僕の山登りの原点ですわ。もしあの時に時間をかけてザイルを使って安全に登っていたら、恐怖も少なかった代わりに、今のように話題にのぼることもなかったでしょうね」（由ベエ）。「よっちゃんのすぐ後を登っていて、よっちゃんのうち震えるような恐怖心がビンビン伝わってきましたねえ」（山猿）。「氷壁に打ち込むスクリューハーケンはもっていってなかったので、ノーザイルで登ることに決めたが、むちゃくちゃヤバイと感じていた」（M蔵）。

わずか１時間あまりの登攀とはいえ、われわれにとって池ノ谷ガリーの恐怖の体験は、何十年たっても生々しく甦る想い出だ。そして、４人を強く結びつける、かけがえのない共同体験なのだ。（嘉）

義兄とその家族（29）

夫婦二人分足しても1ヵ月の生活費に遠く及ばない年金暮らしに突入した、姉ちゃんと義兄。まあ、多少の蓄えはあるだろうし、持ち家で、ローンや家賃を払うわけではないので、何とか平穏に生きていくことはできる。そう、思っていた。姉が「私な、家、買お、思ってんねん」と言い出すまでは。「え？　何、買うって？」思わず聞き直した。だって、ないんですよ、現金収入。一応、あるんです、家。築30年近くになると思うけど、大工さんに建ててもらった案外、いい家が。

「どおすんのん、今から、家買うって？」。アホな姉をもつと、まったく、妹は心が休まらない。そりゃ、もちろん、姉が家を買おうが、ライオンを買おうが、姉の勝手だ。姉が自分のカネですることに、四の五の言う権利は妹にはないが、それでも「何でやねん！　何で、今から家買う必要があんねん」と叫ばずにはいられない。「いまの家に十分、住めるのに何で？　駅前のマンションとかを買うってこと？」

「ううん。もっと広い家を買いたいねん」。と言われたら、ふつう、息子夫婦と同居したいわけ？　という質問になるかと思うが、姉に限ってそれはありえない。姉は、息子の嫁と暮らすぐらいなら、ホームレスのおばちゃんになって、公園の水道で歯磨きをする方を選ぶだろう（姉は歯槽膿漏と戦っていて、歯磨き時間が異様に長い）。

「広い家って、二人っきりやのに！　今の家、十分、広いやん！」

姉はシャラっと、「まあ、広さが問題ではないわな。ゆったりと庭でお茶ぐらい、飲みたいと思てサ」。何が、思てサ、だ。自慢に聞こえると困るが、姉んちは、「庭でお茶が飲める」ようになっている。家の前の道から10段ぐらいの段々を上がったところが庭で、その半分ぐらいが、一応、ポーチと呼べるスペースになっている。都会で、そんな家だったら、結構、お高いだろうが、まあ柏原あたりだったら、庶民でも、その気になれば手に入れられる。とくに姉みたいに、土地付きの古家を買う、何年か後に建て替える、というように段階を経れば、大きなローンを抱えることもない。

姉が買った古家はまあまあ広い庭に、平屋が建っている物件だった。頭金の大半を出したのは義兄の親で、組んだローンを払ったのは義兄だけど、姉が率先して探し、決めて、ちゃちゃっとコトを進めたので、つい「姉が買った」と言ってしまったが。義兄の身内の皆さんは気が悪いことだろう。許していただきたい。ともあれ――。

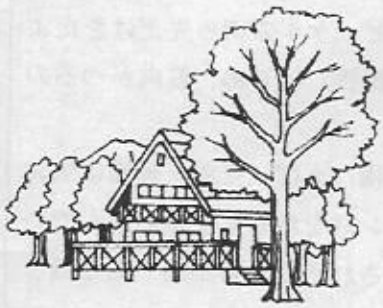
その平屋は、ボロ家なんだけど、古びた桃色の家で、どこかかわいらしい感じだった。可愛い少女が成長しないまま70年、トシとったような家、とでもいえばわかっていただけるだろうか。ちょっと不気味だが、古い家には、どこか不気味さがつきまとうものだ。案の定（何が案の定だろうか）、その家は台所の水まわりが動脈硬化をおこしたり（水漏れ）、咳をしたら肋骨が折れたり（風が吹いて、家のどこかが壊れた、と姉が騒いでいた）、骨粗相症（室内の壁がぽろぽろ落ちてきていた）だったりと、老化は確実に進んでいたが、でも、その家で姉は甥っこを育て、義兄はせっせと働いてローンを返し続けた。

そして、甥っ子が小学4年生ぐらいのときに、姉は一大決心をして、その家を今の家に建て替えた（ローンは義兄が払ったのに、姉が建て替えた、と言ってしまう私を…）。

元の「成長しないまま、おばあちゃんになってしまった」家は、突然、マドロス姿（古いなあ）の青年になって甦った。何で、マドロスかというと、姉は白い壁にモスグリーンの屋根という洋風のイメージの2階建てにしたので。洋風＝外国帰り＝マドロスという発想がすでに大正か昭和初期だが、元のばあちゃんぽい家を見慣れた目には、新しい家の白い壁はまばゆく、海原を走る白い帆を思わせ、颯爽とした若者のごとく輝いて見えたのである（かなり、大げさ。思い出は美しく、誇大である）。でもまあ、ご近所の人も軽くそう思ってくれたようで、甥っ子は小学校で、ときどき「あの白い家の子？」と聞かれる、と言っていた。多分、女の子だと思うが。だって、女は白い家が好きだから。

その白い家、マドロス姿のかっこいい青年は、いっしかロマンスグレーになり、「白い家って、どこよ？」になりはしたが、まだ十分に壮年だ。姉たち夫婦の残りの人生分ぐらい、軽く働ける。だのに、姉は「家を買う」という。そんな名前の本が出ていて、テレビ番組にまでなっていた。たしか、「フリーター、家を買う」だった。姉たちの場合、「シルバー、家を買う」である。いや、そんな冗談を言っている場合ではない。年金はすずめの涙、夫はガン、妻は無職、ついでに言わせていただけば、働く気力も体力も能力もナシ。その状況で、これから、家を買うなんて、どこを押せばそんな考えが出てくるんだ！。

しかも、である。「もう、大体、目星は付けてんねん。90坪ほどあんねん」。



いっくら田舎でも90坪の家は広い。夫婦二人に広過ぎる。しかも、姉が買おうとしているのは、いわゆる田舎家ではない。大規模宅地開発で造成された住宅地。庭付きの一戸建てが整然と並んでいる「〇〇ネオポリス」だ。

「原発で避難してきた福島の人が、定住するために買っていて、ここにきて300万ほど値上がりしてるらしいけどな」。さして悔しくもなさそうに姉は言った。

もう、そこまでリサーチしていたとは。私は無力感にさいなまれつつ、一応、反撃を試みた。「姉チャンとこ、今の家のポーチでお茶、飲めるやん、飲もと思たら」。

姉はフンという感じで、「こんなとこ、あかんわ。ネコ来るし」。

義兄の転勤に姉はいつもついて行っていたので、姉の家は空き家になっていた時期が結構、長い。その間に、どうやらご近所のネコたちの集会場になっていたらしく、今でも、姉たちが外出して帰ってくると、ネコが数匹、ポーチでくつろいだり、昼寝したりしているらしい。「ネコが何匹も、(庭に)おってみ。気絶しそうになるで」。姉はそもそも、ネコが嫌いな人種だ。

確か、あれは姉が高校生ぐらいだったと記憶しているが、私たちが育った家の裏にあったレンガ塀(うちの塀ではなくて、うちが、その塀のこちら側にあった、ということなのだが)の上を歩いているネコめがけて、姉が2階から洗濯バサミを投げつけているのを目撃したことがある。プラスチックの洗濯バサミでは殺傷能力はないし、そもそも絶対に当たらないから、動物虐待にはあたらないと思うが、私は「えっ、ふつう、そういうことするか?」と呆れた。敵意を持って向かってくる動物に、思わず手に持っていたものを投げつけた、というならわかるが、向こうはゆったり散歩していただけである。そのネコは悠然と歩き去ったので、洗濯バサミを回収不能にした姉の負けだが、「ちょっと脅かしたったら、ここを通れへんようになるかと思って」とヤクザみたいなことをつぶやいていた。

もしかしたら、あのときのネコはネコ界の王様だったのかもしれない。「王様に無礼を働きおって」と、王の家来ネコたちが何世代にもわたって姉に仕返しするために、ポーチに集まって嫌がらせをしているのかもしれない。

「言うとくけど」と私は言ってやった。「ネコのいてへんとこなんか、日本中、どこにもないで」。それでも、姉は気を変える風はまったくなく、「実はな〜」ととっても明るく、楽しそうに、その恐るべき無謀な引っ越し計画の全容を語り始めたのである。「あんたも一緒に住んだらええと思って」。ああ、もうっ、姉チャンてば!

(AO)

私の海外経験13

米国時代6 ('78年12月〜'84年1月)

土田 裕

シカゴ支店長

米国三井物産ではニューヨーク本店に社長がいて東京本社の専務、常務クラスが派遣される。一四の支店にはAクラス、Bクラスがあってロサンジェルス、シカゴ、サンフランシスコ、ヒューストンなどはAクラスで本社の部長クラス、アトランタ、デトロイト、クリーブランドなどの小店は課長が派遣される。例えれば支店長は大家、部下の我々は店子のようなもので実際の業務はそれぞれの部門のジェネラル・マネージャーに任されており、一定の金額を越えた場合のみ支店長の許可を必要とした。

私が着任した年のシカゴ支店長はA氏で鉄鋼出身であった。非常に温厚な人柄で人気があったが、丁度交代期で三ヶ月後に帰国、非鉄出身のB氏がデトロイト支店長から栄進してきた。立派な押し出しに似合わず些細なことを気にするタイプだった。

機械課長と酒を飲んでいる時「Bさんと一緒に日本の客先の接待ゴルフに行った時、彼が木の中に打ち込んだボールを足で転がして打ちやすいところに出した」というので「まさか、そんなことはありえないでしょう」と半信半疑だった。ある時、今度は物資課のお客の接待ゴルフに支店長に来てもらった。あるホールで偶々、支店長のボールと私のボールが同じバンカーに入った。支店長が先、私が次に打ち、二人とも首尾良くグリーンに乗ったのでやれやれと思って立っていると、支店長が私の方にそっと近づいてきて彼のボールを私にそっと握らせた。バンカーで支店長が打ったのは私のボールだったのだ。誤球は本来なら2打罰だが、負けず嫌いの彼はペナルティを払うのがいやだったのか誤魔化したのだった。本人の名誉にかかわるので一切他言はしなかったが、あれから三十年も経ってもう時効だと思う。

美人で医師資格をもつ奥さんがいるのに白人の支店長秘書とのよからぬ噂があった。息子さんも東大に入学して恵まれた家庭だったが、後に奥さんが五十台で早世されたとのことだった。B氏は二年で本社へ転勤となった。通常、シカゴ支店長の後は本社の取締役へ栄転するのだが同氏は非鉄部門の一部長で帰ることになった。

B氏の後のC氏は化学品・肥料部門出身で、当初からエリートといわれていた。若い頃にパリ、ロサンジェルス駐在の経

験がありハーバードビジネス・スクールにも派遣されたことがありスマートな人だった。部下思いで私がある商材で本社の部長代理と揉めた時も終始、私の側に立ち援護してくれたのは有難かった。

C氏に限ったことではないが、支店長は本社の幹部が来られると大変気を遣うことになる。私の在任中にも何度か本社の社長がお見えになったが、そのたびに支店の邦人社員全員に細かな指示があり、奥さん連中も総動員して支店長社宅での接待を行うことになる。

C氏はカラオケは苦手で人前では絶対歌わない人だったが、当時の本社社長はカラオケ大好きで出張先ではかならずカラオケパーティをやるという噂があった。そのためわざわざ日本からカラオケセットを取り寄せることになり、物資課に指示があり大阪から送ってもらった。社長の十八番の歌も秘書室から事前に聞いてあったので、ソフトの方も抜かりなく準備してあり、当日、社長は大変ご機嫌がよかった。こういうことはハンブルグ支店でも後に勤務することになるシドニーでも経験したが、日本の会社ならどこでもやっていることかもしれない。

二年間C支店長に仕えて、私の方が先に本社へ転勤になったが、その後同氏は本社の取締役・人事部長、常務・専務・副社長と順調に昇進した。

家族旅行

シカゴではハンブルグと違って一つの部門の責任者であり、まして物資課はシカゴ店の稼ぎ頭としての責任もあり、ゆっくり家族旅行を楽しむ余裕は無かった。それでも夏休みとクリスマスには一週間以内で家族旅行に出かけた。順不同であるが、出かけた先での経験を綴ってみる。

ニューヨーク・ワシントンDC：着任して最初の年末休暇はニューヨークとワシントンDCに出かけた。昼間は観光バスで市内観光、初めて自由の女神の中に入って狭い階段を登った、エンパイアステートビル屋上では吹きさらしの中に比較的低い柵があって意外とお粗末だったので驚いた。子供が小さいので夜はブロードウエイのミュージカルなどを見る余裕も無くマディソン・スクエアガーデン傍のホテルで大晦日を迎えた。TVでは年末のNHK紅白歌合戦のダイジェスト版をやっていた。一四時間の時差があるので1月1日になってからだったと思う。ニューヨークに2泊してからシャットルフライトでワシントンへ行った。ワシントンでは例のペシルヴァニア・アベニュー辺りを散歩してワシントン モニュメント、スミソニアン博物館、国立航空宇宙博物館を見て周った。ホワイトハウスも観光ルートになっており、簡単に入れるが、意外と質素な建物と家具であることに驚いた。これなら日本の首相官邸の方がはるかに立派であろうと思った。アーリントン墓地のケネディ大統領の墓には永遠のガスの炎が燃えていた。レンタカーで隣のバーモント州まで行き田舎町を走ったが取り立てての印象はない。ワシントンで気がつくのは圧倒的に黒人が多いということである。自由の国アメリカの象徴であれば当然とも言えたが道行く人の半数以上が黒人であることはシカゴから来た人間には違和感があった。

サンフランシスコ・ヨセミテ国立公園：サンフランシスコは前に述べたように私の好きな町のひとつである。サンフランシスコ湾はシドニー、シンガポールと並び世界三大美港の一つでゴールデンブリッジやアルカトラズ島を巡るハーバークルーズを楽しんだ。また無数のアザラシが湾の一角にたむろしていた。レンタカーをしてヨセミテ公園まで行った時は大変な目にあった。長く曲がりくねった山道を長時間走ったため、私以外の家族三人が車酔いをしてしまった。それでも途中雄大な景色を楽しみながらヨセミテビレッジに辿りついたら降雪のため是より先は通行止めという。イースター休暇の四月であったが高地のためこの時期でもしばしば雪が降るとのことだった。仕方がないので引き返したが暗くなってきたので途中のモーテルで一泊し、ほうほうの体でサンフランシスコへ帰ってきた。

シアトル・カナディアンロッキー：シカゴの旅行社のツアーに参加したので日本人は我々だけであった。シアトルまで飛んでシアトルからバスでバンクーバー、コロンビア大氷原、バンフーなどを周る旅であるが、氷河の上を歩いたのはこの時が最初で雄大な景色は今でも脳裏に残っている。バンフーでは大橋巨泉のOKショップがあり、たいした物はなにも売ってないが客は殆ど日本人だった。

その他、ニューオルリーンズ、ボストン（前述）セントルイス、ミルウオーキーなどへ二、三日の小旅行で出かけた。欧州と違って歴史の浅いアメリカの町はどこも似たり寄ったりで、アメリカを旅するならグランドキャニオン、イエローストーンなどの大自然がお薦めである。

ヨセミテ国立公園

2対4000

山彦海彦

鬱病などのメンタルな病気になる社員が頻発して対策に困り果てている企業が多い昨今、なぜオフィスや職場、自宅がシックハウス・シックビルディングでその揮発する化学物質から鬱病になっていると気が付かないか不思議で仕方がありません。鬱病には「新築鬱病」「引っ越し鬱病」「転勤鬱病」と名付けられた病名さえあります。今はただストレスが原因だとしか精神科医は分析していません。そんな精神科医しか今の日本にはいないのでしょうか。

去年と一昨年の年末にはNHKで司馬遼太郎氏の歴史ドラマ「坂の上の雲」が放送されました。旅順攻略では多くの陸軍兵士が死にました。でも歴史上は戦闘で死んだ兵士より脚気にかかった陸軍兵士の方が4倍多く、戦死者とは別にその半数以上が脚気によって命を落としました。日露戦争の戦死者4万7千人、脚気患者25万人、脚気死亡者2万7千人。

相対して海軍ではイギリス海軍の経験から食物原因説が支持され麦飯とされた。結果、脚気で倒れた兵士は少なかった逸話は有名です。後にビタミンB1欠乏が特定され、それらの欠乏が病の原因になることが知られるようになりました。

同じような病気に「ペラグラ」があることを皆さんはご存知でしょうか。ペラグラは、日光過敏症から始まって皮膚炎が起こり、その次に下痢嘔吐などの消化器官の症状が現れそして統合失調症と区別がつかない精神症状が現れて死に至ります。

1735年にスペインで初出し、トウモロコシを主食とするイタリア北部などで猛威をふるい、「イタリア癩病」、「アストゥリアス癩病」などと呼ばれていました。ペラグラは季節性があり食事の内容が主にトウモロコシ製品に偏る春から夏にかけて起こりやすい傾向がありました。

1937年にナイアシン（ビタミンB3）欠乏症だと判明しました。ナイアシンは必須アミノ酸のトリプトファンから体内で生合成されるのですが、トウモロコシのトリプトファンはアルカリ処理をしないと腸から吸収されないのです。トウモロコシが原産の南アメリカでは古代インカの知恵として灰水の上澄みなどのアルカリ水でトウモロコシ粒を浸してから調理する方法が（トルティーアなど）伝わっていたのです。それを知らないまま作物としてトウモロコシが栽培されるようになるとインカを征服した宗主国のスペインからペラグラが始まる結果となりました。最近の精神病院調査ではなんとこのペラグラが統合失調症患者の40人に1人誤診されていることが判明しています。

今から60年ほど前にこれらのことに注目した精神科医がいました。カナダのエイブラム・フォッファーとイギリスのハンフレー・オズモンドです。彼らは統合失調症の原因はビタミン・ミネラルの欠乏による生理活性物質で神経伝達物質のアドレナリンが変化したアドレノクロムではないかと推し、それを阻止する物質としてナイアシンを選びビタミンCと共にグラム単位で服用する治療法を考案しました。「分子矯正医学」の始まりです。

アドレノクロムは幻覚を引き起こす麻薬のメスカリンと同じ性質のもので、彼らは交互にメスカリンを飲んで自ら人体実験します。車を歩道に突っ込みたくなる衝動など自分達は確かにその時狂っていたと述べています。

ナイアシンの大量療法はカナダ、サスカチェワンの彼らの精神病院で患者に施行され、統合失調症に効果があることがわかりました。何よりも鬱病と同様に統合失調症では患者の自殺が多かったのですが、ゼロになりました。彼ら2人は当時参加医師が4000人いた精神医学会で発表しましたが評価されるどころか無視され以後排斥される憂き目に遭います。

その彼らにライナス・ポーリング博士と言う絶大な支援者が現れます。ノーベル賞を2回受賞された生化学者でした。ポーリング博士がビタミン大量療法に出会う逸話がアメリカの分子矯正医学を行っていた精神科医マイケル・レッサー氏によって語られています。

レッサー氏が当時開業していたアメリカ西海岸の都市で統合失調症になったある医師の息子がいました。その医師は治すすべもなく悲観に暮れていたのですが、偶然レッサー氏の業績を知ったその父親は、藁おもすがる思いで

トウモロコシの原産地、中米では、古代インカの時代から主食として栽培されてきた。その調理法には、インカの知恵が生かされている。

息子への差し入れとしてナイアシンとビタミンCを大量に仕込んだサンドウイッチを毎日おやつとして届けました。すると間もなく息子は退院できのでした。その出来事は町の噂となり、たまたま滞在していたライナス・ポーリング博士に伝わることになります。ポーリング氏は専門とする分野から分子矯正医学の正当性を直感され、以後その支持者となりかつ、ガンのビタミンC大量療法に応用され分野を広げていくことになります。

なぜガンかと言うと先に述べた統合失調症のビタミン療法を行っていた患者を追跡調査したところガンで死んだ人がいなかったことから発見されました。日本でのガンのビタミンC大量療法は溝口徹医師の普及活動で今現在採用される医師が増えてきました。ご心配される方は是非調べて下さい。

私自身もそれらの情報から自らの息子を救った日本の母親を知っております。その母親とは日本の分子矯正医学患者会が主催したマイケル・レッサー医師の講演会で僕と同席されていた女性でした。彼女はビタミンの大量療法と食物アレルギーの特定（脳アレルギーの原因）とその防御で見事に息子を回復させ、統合失調症での高校中退から大検に合格させ、大学生とさせている奇跡を聞くことができました。

わが沖縄考2

具志晩学

日本民俗学の巨星、柳田国男は、大正十年の紀行文学『海南小記』と、昭和三十六年、晩年の大作『海上の道』とに依って、日本の稲作文化が南方から沖縄諸島を経て伝播したことを示唆した。

柳田国男はこよなく沖縄を愛した。「我々の学問にとって、沖縄の発見ということは画期的の大事件であった。」（郷土生活の研究法）

その後、この北上説に疑義を呈する学者も出たが、平成十五年に、柳田説をより一層展開させる学説が出た。その人物と著者が十二月二十日、朝日新聞に紹介された。

「元国立民族博物館長の佐々木高明（こうめい）さん（民族学）が、日本文化の基層に切り込むスケールの大きな学説を提唱した。名づけて、「新・海上の道」説。黒潮に乗って、多様な「南島農耕文化」が南中国・東南アジアから北上し、後の本格的な水田耕作を受け入れる素地を作った、という内容だ。」

佐々木高明氏は南方熊楠賞の受賞が決まり、翌年の二月二十七日、同誌の（ひと）欄に登場した。

「日本の南方フィリピン東岸に源を発し、北上する黒潮。この潮流が運んできた農耕文化の多様性を研究してきた。

キーワードは「新・海上の道」である。熊楠と並ぶ民俗学の先駆者柳田国男が説いた「海上の道」が下敷きにある。日本人の祖先は稲を携えて、中国南部から北上してきたと唱えた柳田。これに対し、「新・海上の道」で、アワ、イモ、などの畑作と稲作が複合する農耕文化が、中国南部や東南アジアなどから台湾を通って日本に伝わったと説いた。」

柳田学と双璧となる折口学を大成した折口信夫も沖縄研究に大きな業績を残した。その著書『古代研究』の「追ひ書」に書いている。

「私は、沖縄に二度渡った。そして、島の伝承に、実感を催されて、古代日本の姿を見出した。」

暫く見てくると、（沖縄は本来、日本人とは別の民族がつくっていた国である。）という発想は、岩中氏以外にだれ一人として浮かぶまい。

（だいたい、沖縄の人は、風貌からしてヤマト民族とはちがう。太くて濃い眉毛、浅黒い皮膚など、誰がどうみても南方系の顔つきをしているし、言葉も、日本語の方言というより、まったく別の言葉といったほうが正しい。）

岩中氏の単細胞的思考もここに極まっている。

南方系の顔つきの人は江戸っ子にもいる。太くて濃い眉毛は浪花男にも見られる。浅黒い皮膚の京美人もいる。氏の風貌は北方系なのだろうか。これは比率の問題であるから、この風貌に関しては、氏の見解を看過してもよいであろう。しかし沖縄方言への認識は、根底から改めねばなるまい。氏の文化人としての資質が問われる。

沖縄の言葉は日本の方言の一つなのである。

記紀、万葉の中の言葉が、今日の沖縄の話し言葉に、幾つか遺われていることに、氏は無知なようだ。

和歌に比較される琉歌は基本的には、八・八・八・六音の三十字に詠まれる。音曲にも乗る。一首をあげる。

深山鶯の節やしらねども　梅の匂ひしちど　春やしゆる

伊波普猷（1876-1947）

琉球王宮、首里城の正殿。
第二次大戦のとき、破壊された。

○意訳　奥山の鶯は季節を知らないのに　梅の匂いに春を知ることだ

沖縄学の基礎を確立した伊波普猷はその名著『古琉球』の中で、琉球語と日本古代語とを比較検証し、次のように論述している。

「琉球の単語は十中八九まで日本と同語源のものであるといっても差し支えはない。ただ音韻の変化や語尾の変化によって、ちょっときいては外国語のようであるが、能くきいてみると日本語の姉妹語である事がわかるであろう。」

伊波普猷が集めた語彙の中から三つの単語を挙げたい。

よむ　算（かぞ）えること、「わが恋はよむともつきじ荒磯海のはまのまさごはよ　みつくすとも」、琉歌にも「天（てん）の郡星（むれぼし）や、よめばよまれゆり、親のよせ事やよみもならぬ」というのがある。

あかる　別（わか）るること、「人々あかるゝけはひなどすめり」（源氏・空蟬）

かなし　可愛（かわゆ）きこと、「われかなしと思ふむすめを」（源氏・夕顔）『古琉球』伊波普猷著、外間守善校訂、岩波文庫

紫式部が話していた言葉が沖縄に行けば、今でも聞かれるのである。

民芸運動を提唱し指導した柳宗悦は、沖縄に古代日本の言語の面影があることを論証した。沖縄の文化を探求し《琉球の富》と題する文を書いた。その一部を紹介する。

「萬葉時代が今も琉球には現存してゐるのです。萬葉の格調にぢかに觸れようとする人は沖縄を訪ふにしくはありません。」

「候文の如きものを遠い過去に描いてゐる吾々も、沖縄に来てみれば、それが現に活々と用いられてゐる日常の言葉だと云うことを知るのです。実に和語に於ては、沖縄はどんな地方よりも古語を保ってゐる個所なのです。」

『琉球の文化』式場隆三郎編、榕樹社

沖縄の言葉は「まったく別の言葉といったほうが正しい」とする認識を、岩中氏が、沖縄学を少し学習する事に依って、破棄されることを期待したい。

「音楽も日本とはまるでちがう」、と岩中氏は断言している。ここで言う音楽とは、若い人たちのそれらしいが、それなら全く同じだ。東京で拍手で迎えられれば、東南アジアでも喝采される。当然である。若者のミュージックは、世界共通なのだ。また民謡は北海道から沖縄まで、底に流れる情感は全国に通ずるものだ。旋律は千差万別ながら、民謡は何処の土地で聞いても心に響く。氏は音楽にも問題があるようだ。ある種の沖縄民謡の軽快な調子と、例えば江戸端唄の賑やかな囃子はよく調和する、と私は感ずる。

因に、中国の三弦が沖縄に入り、三線（さんしん）となり、それが永禄年間、大阪堺に伝来し琵琶法師たちに改良されたのが三味線である。

同時に沖縄の音曲も伝わり大阪や江戸の地唄などに多少影響を与えた。江戸初期の地唄奏者、作曲者である石村検校が作曲した最古の三味線組歌を琉球組というのは、そのことを物語っている。

『日本国語大辞典』の「琉球組」の項目に、石村検校に関連して「糸竹初心集」の文例がある。

「文禄の頃ほひ、石村検校という琵琶法師あり。心たくみにして、器用無双の者也。あるとき琉球の島にわたりけるに、かの島に小弓といひて、糸三筋にてならす物有り（略）其の後、石村、京都にかえりて、おなじく琵琶をやつし、此の三味線をつくり出せり。琉球の島よりえて来るという心にて、琉球組という事をつくりおけり。」

古井　勇の短歌も引用されている。

「あたらしき船歌かなし松の葉の琉球組の歌のごとくに」

デイサービス

ピンポ～ン、「お迎えにあがりました」。インターフォンごしに元気のよい、愛想もよろしい声が部屋に響く。

あの声はチャボに間違いない。てきぱきと仕事をこなしているようで、けっこう蕪雑なおばさんだ。

週に二回お袋を施設に連れて行って、風呂に入れてくれる。たいへんありがたいサービスだ。迎えはおばさんとおっさんのペアで来る。シルバーバック、シシオドシ、オニガワラ、ノブタ、キツネザル、メガネザル……などと勝手に呼んでいるのだが、それぞれ特徴があって、仕事の仕方もいろいろだ。きちんとこなす人もあれば、いい加減にすます人もいる。要領のいい人、悪い人、さまざまである。

最悪ペアはキリギリスとバカーチンだ。ベッドから車いすに移すとき、タイミングよく二人で同時に持ちあげればいいところ、タイミングが合わないもんだから、お袋は腰をひねるような形になり、顔をしかめてうなっている。スロープを使って框から土間に下ろすとき、勢いよくスロープからタイヤがはみ出て、お袋が土間に落ちそうになった。風呂に行くのも命がけだ。

これに懲りて、ベッドから車いすに移すのは僕ひとりでやる。やり方は浮き取りという古武術の技で、55キロのお袋を軽々と上げることができる優れ技なのだ。（猿）

連載　女８０年の軌跡　眞粧さん

おじいちゃんとおばあちゃん

私は小学生の頃、別に暮らしている祖父母が住む佐治へよく遊びに行った。事情はわからないまま、夏休み、冬休みといえば、父が自転車に乗せて連れていってくれた。

祖父に「寝小便するなよ」とよく言われた。祖父は大工の棟梁であり、若衆が三人ほど二階に寝泊りしていた。若衆がハッピ着て仕事にゆくのを見送ってから、祖母が「ご飯出来たよ」とおこしてくれた。

あの時の布団の感覚は今でも肌についている。祖父は長火鉢でキセルをポンと音をたてながら「ようねむれたかな」と言う。

祖母といっても血のつながりはなく、祖父の妾さんであった。つぎさんという名で、私を孫のように気持ちよく接してくれた。食べるご馳走、身のまわりのことなど、コソコソとよく働く人だなあ、と思ってみていた。

私は、「おじいちゃん、おばあちゃん」と呼び、出入りが許されていた。おじいちゃんにすれば身内だもの、口にしなくても、可愛いかったのかもしれない。離れて暮らしていても、時季到来のものが、おつぎおばあさんの手作りで届けられる。

さなぼり

村中の田植えが終わると、農家は「早苗上り」という休みをむかえる。早苗上りには柏餅をつくり、親類へ配る。

佐治からおじいちゃんの柏餅の配達がくる。白のカンカン帽子、黒の絽の羽織、白の麻の着物、下駄履きで…。重箱二つにぎっしり柏餅がつまっている。

「さあ、食べや早苗上りになったなあ」「手伝ったかなあ」と言って私の頭に手をやり、また自転車に乗って、おつぎさんの待っている佐治へ帰ってゆく。

私の仕事は、その柏餅をお寺へ持ってゆくこと。早苗上りになれば何故お寺へ？　わからないまま小道を上がって、やっと本堂へ着く。

電灯もないままの古寺、きつねでも出てきそうなお寺に夫婦づれで住んでいる住職は言葉にもなまりがあって「さなぼりになりましたか。おおきに」と言って受け取り、ボーンと鐘の音をひびかせて、又お盆にのせてお返しがある。

お返しのビワが楽しみで、あの坂道を登っていったのかと思う。弟や妹たちは「しんどい」と口答えをしてお寺の想い出はない。

必ず、おつぎおばあさんは言う。「ちょっと散髪してきたらいい、連れて行ってあげる」と言って、そそくさと手を引いて床松にたのんで、さっさと帰ってしまう。一軒しかない床屋さんに顔を覚えられ、「重吉さんの孫か」と祖父の名前を言う。恥かしい思いがしたけれど、有名なんだと鼻を高くしたりしてた。

父が迎えに来てくれた。「きれいになったなあ」とうれしそうにいう。そのままの頭でクリームまでぬって学校へ行ったら、友達にいじめられた。「やーい、だてこき（美しくすること）」とはやしたてる。みんな自家散髪でねたましいかったのかもしれない。人の心までわかりっこないもの、妹や弟たちに、いろんな事を話をしても、おじいさんの家へも行ったこともないという。

やがて戦争が始まり物資不足の時代がつづいたのも無理はないと思う。私は、なんでもないふとした瞬間に、こんな過去のこと思い出してしまう。

もうぼっぽつ消しゴムで己が歩んで来た人生の長い線を消してゆこう。消しゴムを握っているのは老いかも知れない。

『人気のデザイン』

ショートジャケット

＊

この春夏用にデザインしたショートジャケットですが、とても可愛く出来ました。

着物から服を仕立てます

梵～ぼん～

俳句

土田　裕

青梅と言へどほんのり紅を刷き
遠き日や父の日知らず父は逝き
碑（いしぶみ）に残る名句も梅雨湿り
今年また伝世の木に柿若葉
泰山木花上にどんと重き天

藁女

かいつぶり細き葦にとまり居る
バス停の深き軒下燕くる
大空にああれは揚雲雀
今年又水練ひばち蛙鳴く
蚊をたたき今夏にそなえグッズ買う

編集後記

皆様のおかげで、七十号まで続けられました。重ねて御礼を申し上げます。今後もよろしくお願いします。

歳をとるにしたがい先輩後輩、同級生などの有難味がわかってきました。大事にせないかんと、思う今日此の頃です。